

アンチ錬金術師と分析化学



北 條 正 司

2013年初頭、大相撲の元横綱・大鵬が亡くなった。筆者が子どもの頃に活躍した横綱であり、「巨人、大鵬、卵焼き」とまで謳^{うた}われた。白黒テレビに映る大鵬は、色白で顔立ちが良く、玄人筋を自認する大人は別にして、誰にも人気があった。旧樺太で生まれたが、ソビエト連邦ウクライナ出身でコサックの父親とは、当時の国際情勢により引き離されたという。

数年前、筆者はウクライナ第二の都市ハリコフ(ハルキウ)を訪れた。ハリコフ・カラジン大学で開催されたIUPAC国際会議に招待されたのである。会議の主催者N・マシエドロフ-ペトロシアン教授の研究室で、緑茶を飲みながら談話していると、彼自身はコサックであるという。このとき、ハリコフ市には日本の相撲レスラーに関する何かがあるというような話をしていたが、何のことも分からず、適当な受け答えしかできなかつたのは、今思うと残念至極である。しかし、この国際会議には、有機分子C₆₀フラーレンの存在を予見した大澤映二先生、ドイツのC.ライヒャルト教授などが参加されており、親しく懇談できたのは大きな収穫であった。

筆者は、海洋化学と電気分析化学を主な研究対象または研究手段とする研究室において、分析化学研究の基礎訓練を受けた。大先輩たちの中には、海水から金を回収する研究に携わった人たちもいたと聞かされた。研究が思うように進まないとき、海洋化学分野を担当されていた助教授の先生から、ドイツ語でDas Neues(ダス・ノイエス)、何か新しい物(または現象)を見いだすことが研究であると論じられた。その後、多くの人たちの手を借りながらろうじて学位を授かり、曲がりなりにも分析化学の教育研究が遂行できるようになった。

それから35年にもなるが、当時のポーラログラフ法、電気伝導度法、分光法などを測定手段として、溶液中のイオン濃度や溶存状態を観測する研究を、ほとんど無我夢中で続けてきた。最近になって、室戸海洋深層水(海水)と希硝酸の混合溶液中に純金を溶解させるという(一見途方もない)研究論文をまとめた。これまでに、金の溶解法として様々な手法が開発されてきたが、早くも8世紀には、ゲベルという名のアラビアの錬金術師が、王水による金の溶解法について記述しているという。かの錬金術師の真似ごとながら、毎日、海水に金を溶かし込む作業を続けていると、金を生み出す本来の行為とは逆の、まさに「アンチ錬金術師」にでもなった気分である。

最後に、2014年には本会第63年会在東広島市で開催されることを述べておきたい。現支部長として、来年度の年会には一人でも多くの方々にご参加いただき、日ごろのダス・ノイエスに満ちた研究成果を持ち寄り、自由闊達に討論していただくことを切に願っている。

〔Masashi Hojo, 高知大学理学部, 日本分析化学会中国四国支部長〕